

編纂した『通信全覧』、初期外務省編纂の『続通信全覧』、太政官などで編纂された「外交通紀稿本」「外交紀事本末底本」、外務省編纂の「幕末外交文書集」等である。これらの編纂物は、序章第二節「幕末期外交文書」研究の沿革にあるように、外交史はもちろん、当時の経済や社会等を知る必須の史料群として、多くの個別研究や史料集編纂に活用されてきたが、編纂物そのものの研究は十分になされてこなかった、という。これに対して本書の著者は、外務省外交史料館、東京大学史料編纂所、国立公文書館内閣文庫等の編纂諸本や外交関係文書原本を詳細に調査・研究し、それぞれの編纂の目的、組織体制、中心編者、内容構成、経緯、諸本の関係・伝来などを明らかにしている。その結果、たとえば、ともに後の『大日本古文書 幕末外国関係文書』につながる幕末外交文書集でありながら、『通信全覧』『続通信全覧』編纂の目的が、外交機構にとって不可欠であった外交文書の整備であったのに対し、「外交通紀稿本」「外交紀事本末底本」等は、明治政府要路の政治的要請に基づいて構想された外交通史編纂のための史料編纂であったことが明らかにされている。

史料は単にその内容によってのみ評価、あるいは整理するのではなく、その作成・管理の目的や組織体系を重視されねばならない。それは、史料群を単位に考えられることが一般的であるが、これら編纂物を単位にしても同様のことがいえよう。そもそも「編纂」とは、これら外交文書集のように、原文書の筆写によってなされる場合にも、原文書自体を規定や規則に従って簿冊化する場合にも使われる言葉である。文書の筆写により冊子形態に編集された編纂物は、その一群の冊子が史料群にみだてられよう。その編纂の目的や組織、方法、構成等の調査・研究があつてこそ、そこに収められた文書も有効に活用され、また、そのような編纂物を必要とした組織ないしは個人の要請・活動を知り、さらには政治・社会的な洞察につながる事となる。

近代日本と幕末外交文書編纂の研究

田中正弘著

京都市 思文閣出版発行 1998.2

461p 22cm 9,800円

本書は、著者がこの10年余りの間に書かれた論文に、新稿と附録を加えて再構成されたものである。その目的は、本書冒頭に「幕末期外交文書」の編纂が徳川幕府外国方、明治初期外務省、太政官、あるいは宮内省、内閣などでいかなる歴史的展開をみたか、開国以後より明治後期の『大日本古文書 幕末外国関係文書』編纂にいたる経緯を一貫して説明すること」と明示されている。具体的な分析対象とされた編纂物は「徳川幕府外国方の

近年、編纂事業や編纂物を正面からとりあげた歴史研究が増えてきているように思われる。近世後期から幕末維新时期では、幕府の編纂事業、近世村の旧記・地誌編纂、「あとがき」で田中氏が「情報資料集」と評価している幕末の「風説留」などの研究がある。これらの研究は、目的的には史料群のなかの一点にとどまりがちなこれら編纂物のもつ、固有の目的や背景を分析することの必要性と有効性を示している。ことに国家の外交活動によってのみ生み出される外交文書においては、著者が「外交活動の展開と「外交記録」の編纂、そして外交史料の公刊は一体にして、かつ表裏の関係にあり、この問題は幕末以来、そのときどきにおける日本国家の在り方とその対応策が色濃く投影されており、いわば国家史の重要な部分を構成する」と述べているような性格を持つことになろう。

そのなかでも、幕府外国方及び外務省という、外交担当機構によって編纂された『通信全覧』『続通信全覧』は、いわゆる「史料」編纂ではなく、その実務上の必要から、現用文書・半現用文書を編纂したものであることに注目させられる。幕府外国方の外交文書編集構想は「まず第一に外交文書をいかにして保全するか。そして次に締約国の増加とともに次第に外交案件も複雑化の度合いを深め、かつ外交文書量の増大する中で、この問題を克服するための迅速な検索と交渉経緯の簡便な把握方法」にあった。「彼我間の交渉に慎重を期すため、いかに実務上有効に機能する「外交文書集」を編纂するかが、課せられた至上の命令であった」。

その結果、『通信全覧』は編年之部、類輯之部、類輯提要之部という三部から構成されることとなる。それぞれの具体的な方法は本書を参照されたいが、外交という実務が、原文書と目録という検索方法では事足りず、文書内容そのものも筆写編纂する検索方法を求めたという、情報管理・文書管理の一方策としてとらえることができる。また、初期外務省の編纂担当セクション（明治4年編輯課一

同6年記録編輯課一同7年記録局）では、幕府時代と維新後の（「旧記」＝「当日ニ於テ既ニ結了セル諸記録」）、そして現行の文書（「新記」＝日々ノ書類）が平行して編纂されていた。さらに、その職掌には「記録の編纂によって外交の始末を歴覧することの可能な「史伝」を作る」という認識も示されていたことを、著者は明らかにしている。

本書は、幕末維新时期の外交文書編纂を通して、「編纂」という行為と文書・記録・史料について、多くの示唆を与えてくれる1冊である。それらの示唆につられて、十分な紹介にならず、雑感をならべる駄文となってしまったことを、著者にお詫びしなければならない。

太田富康・埼玉県立文書館